

Peshawar-kai

ペシャワール会報

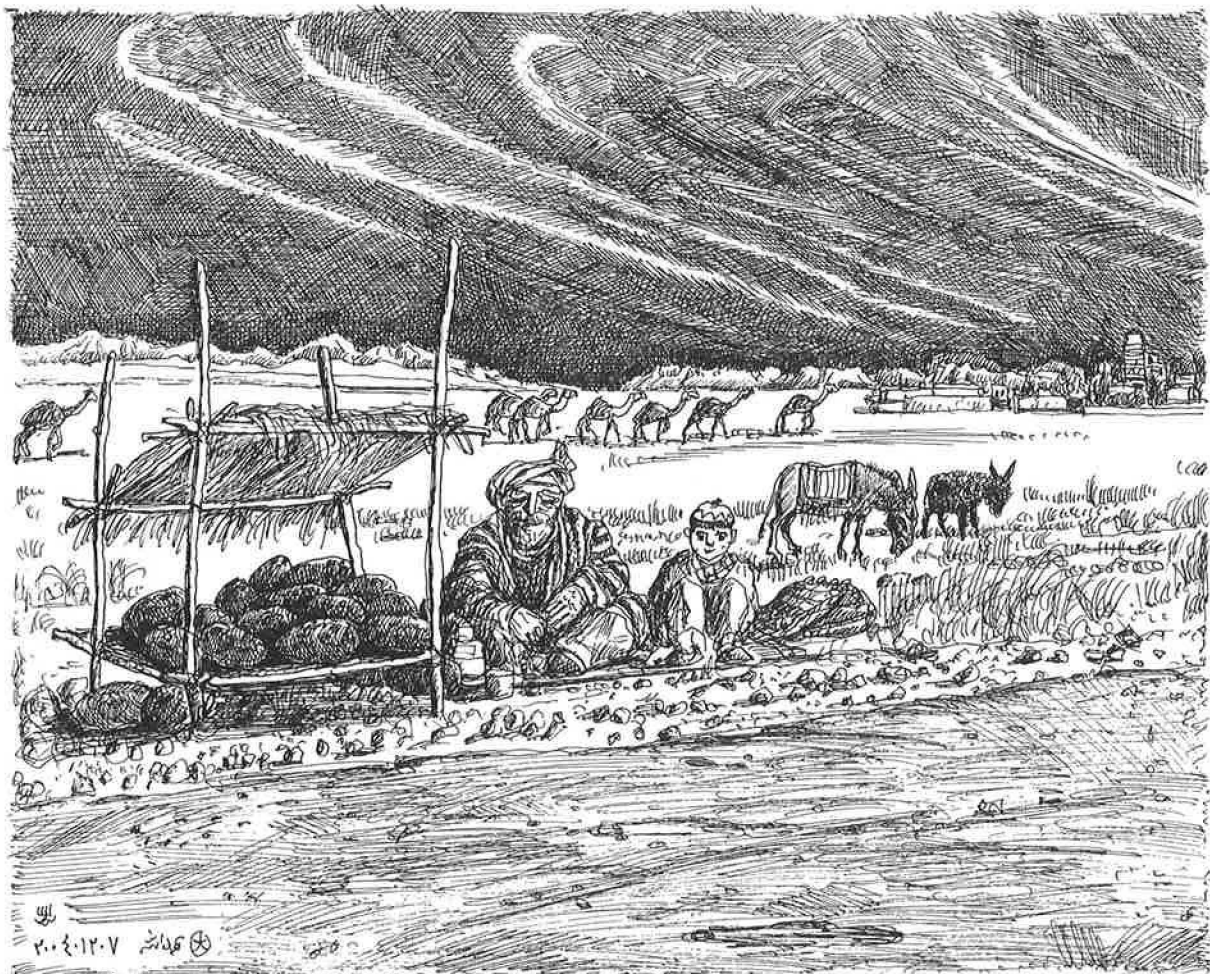
ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル307号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.82

2004年12月15日

〈URL〉 <http://www1m.mesh.ne.jp/~peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@mxb.mesh.ne.jp



表紙絵 アリのハルブザァ売り 甲斐大策

忍び寄る混沌

中村 哲

素人技術者の挑戦

鬼木 稔

猛者ぞろいの掘削現場で

進藤陽一郎

医師辞職、急きょ厳冬期のラシュト診療所へ

仲地省吾

診療体制の混乱にとまどっています

藤田千代子

ペシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

●灌漑用水路は五キロメートル地点を掘削中

忍び寄る混沌

悪化する治安と風紀、病院へ大きな余波

PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長

中村哲

荒れる民心、乱れる風紀

みなさん、お元気でしょうか。

ペシャワールもジャララバードも、暑い夏が過ぎたと思ったら、たちまち寒い冬の到来です。夜は底冷えして、毛布が二枚要ります。アフガニスタンは相変わらずで、九月頃から選挙だの何だのと、政治的なお祭り続き。一万三千名の米軍は去ることができず、特に用水路掘削現場では、毎日超低空で往来が激しくなっているようです。カーブルを初め、東部諸都市でも爆破事件が絶えません。

日本人が特別に誘拐の対象になっているという警告が来たり、外国NGOや国連機関の職員が外出を見合わせたり、何だか、ますます住み難くなったように思えます。かつての静かなペシャワールのたたずまいを思い出させたジャララバードも、車両と排気ガスであふれ、喧騒と不安安全に包まれています。

決して皆がそうではありませんが、民心も変化し始め、露骨な拝金主義が浸透しています。私たちPMS（ペシャワール会医療サービス）の基地病院、診療所、ジャララバード事務所でも、多くの職員たちが高給を求めて去りました。時には、あからさまな賃上げ要求などがあります。

奇妙なのは、教育を受けた人々、都市の知識層にこの風潮が強く、享樂的かつ退廃的な風潮が同時に首都カーブルに蔓延していることです。「教育、教育って言っていたが、何を教えるんだろう」と、つい考えてしまいます。

「日本人は甘い」と思われがちですが、どこい、こちらにも一筋縄でゆかぬ頑固者。理不尽な要求に対しては、これまで、「どうせゼロから始めたのだから、全員解雇してでもまたやり直せ」との態度で臨んできました。現在、第二波の人事更迭、事業内容の見直しが

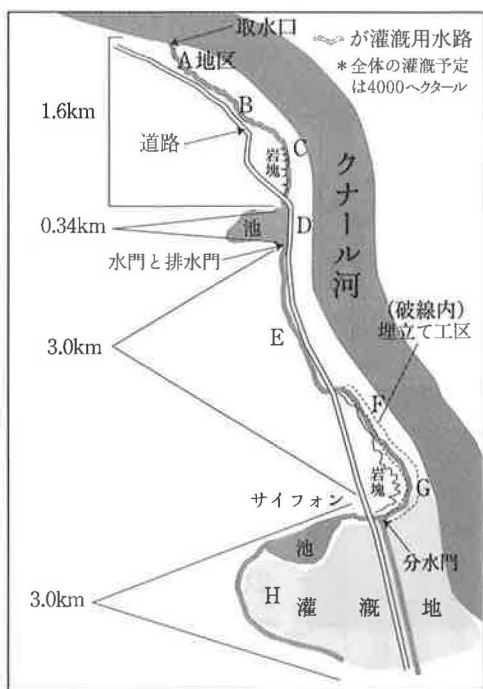


灌漑用水路D地点にある貯水池を臨む中村医師

進みつつあり、「アフガン空爆」やら「復興ブーム」以来、何だか荒らされた拳句の後始末に追われているようで、楽しい気分になりません。おまけに、日本政府の政治的思惑で対日感情が悪化、事業に支障を来すとあては、ふんやりけつたりです。政治や権力というものが、ますます嫌になりました。

「過去数年で最も酷い旱魃」

ところで、アフガニスタンは異常気象につき、水害の日本とは逆に、河川の水量の激減



灌漑用水路概略図（H地点付近まで。全長14キロ）

これに合わせて、水路予定地沿いには続々と村落が復活し始めました。これまで掘った約二キロメートルの水辺には、柳で覆われた緑のベルトが確実に希望を伝えてくれるようです。冬に入り、大挙して山を下ってきた遊牧民たちと、しばらく植樹をめぐる攻防戦です。水辺の柳は伊達に植えているのではなく、その根が護岸して水路を守るからです。これまで植えた一万五千本のうち、二十五パーセントほどが根づきました。さらに二

がさらに進行しています。五年目に入った旱魃は、さすがに識者たちの注意を引き始めました。今年五月になり、やつとWFP（世界食糧計画）が、「今年は過去数年間のうち、最も厳しい旱魃で食糧生産が低下」と初めて危機を訴えました。最近、カーブルの新政権が「地下水利用の灌漑禁止」を全土に命じたのも、その表れです。私たちの飲料水源確保グループの井戸は千三百本を超えましたが、その半数が「完成」の後に再び涸れ、再掘削をくりかえして得られたものです。

かくて、「アフガン問題」が、決して民主

化や教育などでなく、実は人々の生命、人間の生存に関わるものであることが誰の目にも

明らかになってきました。結局、「戦争どころではなかったのだ」と、心ある者なら考えるでしょう。

復活し始めた村落

クナール川から引かれる用水路工事は、十二月現在、取水口から約五キロメートルまで進み、来年一月末までに第一期の灌漑が予定されています。約三百ヘクタールを潤した後、最終地点のブディアライ村からシェイワ郡まで、さらに七キロメートル。約二千ヘクタールの農地回復を目指します。

万本が今冬に植樹されます。「希望は決して人の世界にはなく、自然の恵みにあるのだ」と、まるで隠者のように、背丈以上に成長した柳の林で、水と緑に心を和ませる今日この頃です。

中村哲（なかむらてつ）

九州大学医学部卒。専門Ⅱ神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十年にわたりハセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、現在アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立、診療にあたっている。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレージの復旧。作業地千三百ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、二〇〇三年春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約十六万人（二〇〇三年度）。

*ワーカー通信

素人技術者の挑戦

灌漑水路担当 鬼木 稔

ホコリ高き男？

アフガニスタンにきた六月初旬、すでに酷暑の最中であつた。

用水路現場に着くと、もうもうと砂埃が舞っている中を、ダンプカーや各種重機が行き交い、この初対面の光景に圧倒されてしまった。想像以上の規模で進められている用水路工事の現状に、私に何か出来る仕事があるのだろうか？ イメージしていたボランティアによる用水路建設というより、一大プロジェクトによる公共工事の観を呈している。不安は募るばかりであつた。

まずは道路拡張の埋立工事に配属され、ダンプカーの誘導が仕事の手始めとなった。容赦なく照りつける炎熱の下で、ダンプカーが吐き出す土石から立ち昇る物凄い土埃の洗礼を浴びつつ、全身埃まみれの日々が続く。かつての不安も何処へやら、すっかり「埃高き男」となつてしまった。

工区先端は四・八キロメートル地点

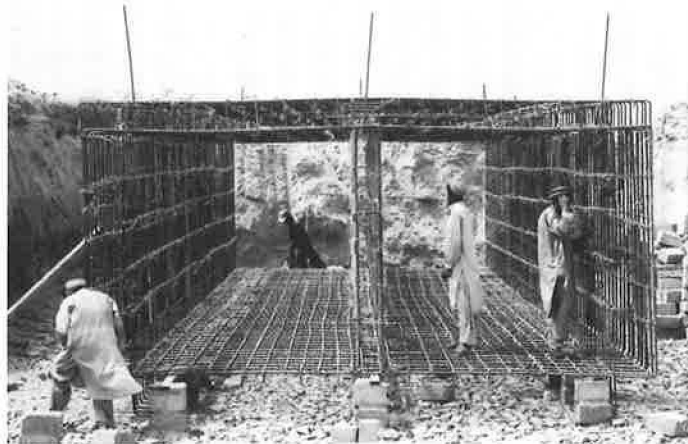
それにしても暑い！ 昼前には五十度まで目盛りが付いた温度計も最上部に達してしまう。いったい何度になっているのだろう。脳ミソが沸騰しそうだ、肌はミイラ化し、常に全身が水分の補給を要求している。

この乾き切った砂漠地帯で動物も植物も人も、万物が生活していく上で、水が命の根源である事を痛切に実感する。と同時に我々の取り組んでいる用水路建設が、重要な鍵を握っている事も認識させられた時期でもあつた。

用水路の進捗状況は、すでに取水口より約二キロメートル、遊水池までが通水可能である。それからさらに四・八キロメートルまで工事の先端は伸びていて、さらにその奥の砂漠地帯に触手が伸びつつある。その間に私達日本人ワーカー五名が、同時進行で八区間を分割担当している。

涸れ川を渡る水道橋と道路を横切る埋没地下用水路が二ヶ所。膨大な埋立量を必要とする、岩稜基部の掘削工事。強固な岩盤掘削もダイナマイト使用の発破作業により、幾多の難所も最早峠を越えている。あと二カ月の工期で、取水口より四・三キロメートルまで通水出来る予定である。

現在私が担当している場所は、我々の区分図ではD地区と呼ばれている所で、遊水池の横の水門作りに専念している。ここはクナール河より導水



灌漑水路D地点の貯水池からの排水部分

する取水口を経て、一旦大きな池に水を溜め、泥を沈澱させて綺麗な上水を用水路に送り込む、また水量を調節する為の排水口と一体となった、本格的な水門の建造である。

担当を始めた七月初旬、上流のヒマラヤ山塊の雪解け水でクナール河が増水し、池の水位も一日二十センチ位の上昇が続いた。大変である！あと二週間もすれば、溢れた池の水で道路の決壊を招く最悪の事態が予測された。中村医師の号令の下、急ぎよ排水門の突貫工事を開始、連日の残業

事務局から

ペシャワール会報 「合本」1983～2004

B5判1300頁
(カラー32頁)

7月31日をもちまして、予約特価での販売を終了致しました。今後は定価（10500円／税・送料込）となりますのでご了承下さい。こちらと同封ハガキ、またはEメールでご注文下さい。郵便払込用紙とともにお届けいたします。



ビデオを作りました

「アフガンを 緑の大地に」

2,000円（税・送料込み）
VHSテープ／約21分

ペシャワール会事務局企画・制作

ペシャワール会発足20周年を記念し、ビデオを制作しました。PMS病院での診察風景や病棟、2000年ごろの旱魃の大地、井戸の掘削現場や水路建設現場、農業計画の様子や、現地の人々、日本人ワーカー達の活動の様子を映像でご覧頂けます。ご希望の方は同封の注文ハガキまたは下記Eメールでご注文下さい。郵便払込用紙といっしょに、通常1～2週間でお届けいたします。

ペシャワール会事務局

〒810-0041

福岡市中央区大名1-10-25 上村第2ビル307

電話 092 (731) 2372 FAX 092 (731) 2373

Eメール peshawar@mx.mesh.ne.jp

と休日出勤のお陰で、仮工事の水門が出来上がった。道路決壊は免れたが、その代償として、次々と日本人ワーカーの体の方が壊れて、入院者続出の犠牲を払わねばならなかった。

アーチ橋の完成に執念

完成した排水門は仮工事とは云え、私の「力作」のレンガのアーチ橋は見事な出来栄であつたと自画自賛しておこう。これが過去形の表現なのは、ヒンズークツシュ山脈からの雪解け水による増水も落ち着き、ぐつと水位が減った八月中旬に、本格工事に着手する為、水門全ての取り壊しになったからである。最後に残ったレンガ部分のアーチ橋は、さながら凱旋門の如く威風堂々と突っ立っていたのが、非常に印象的であつた。

さら地となった場所を掘削し、湧き出る水とのせめぎ合いも、次第に落ち着いてきた九月初旬、本格工事の基礎の鉄筋組みと厚さ一メートル以上のコンクリート打ち工事へと移行した。

完成の青写真は、我が郷土が誇る福岡県浮羽町の三連水車に因んだ訳ではないが、用水路に導水する三連水門と、それに隣接する排水門で、四連水門の圧巻が現れるはずである。

もちろん、執念のレンガの見事なアーチ橋が、頭の中で完成を待っている。

全用水路を通じ、最大の物量を投下するこの水門現場に張り付いて、足かけ五カ月、十一月に入ると、北風が吹き抜ける朝の間は身震いする程寒くなって来た。まだ酷暑の名残りで、日焼けならぬ「日焦げ」の跡が首筋にくつきりと痕跡を残し

ている。あの太陽に痛めつけられた炎熱地獄の日々が、何だかなつかしい気もしてくる。勝手なのである。

スケール片手に指示も綿密

用水路予定地の背後には岩稜が連なっていて、草木一本とて見当たらない岩山は、いわば採石場に隣接した現場でもある。各種の岩質やサイズと、お好み次第、無尽蔵の石は取り放題である。現に、地元は新築ラッシュ。基礎に使用する石を、あちこちで採っている人達を毎日見かけない日はない。我々の現場も、このタダで入手出来る岩石をふんだんに活用している。無論、水門も例外ではない。石組みからレンガ積み、全ての工程を私流でやり通している。スケール片手に、いつも細部に至

るまで指導して廻る。きつと現地の左官達も、あきれているに違いない。大雑把な現地人の感覚と、日本人の細かい感覚のズレ、この溝を埋めるためには、絶対に目を離すことは出来ない。

も 猛者ぞろいの掘削現場で

灌溉用水路担当 進藤陽一郎

「タクラ」

初めまして。現在用水路担当の一人として働いている進藤と申します。アフガニスタンという未知であった環境での数カ月が過ぎました。おかげで髭も少しは伸びました。挨拶くらいは人並みにできるようになりました。パシウトウ語も少しだけ分かるようになりました。そんな僕が常々、おや？面白い、と思っている言葉があります。それは「タクラ」です。「タクラ」とはつまり気力・体力において「力強い」という感じですよ。例えば「タクラですか（タクライ）？」とは「元気ですか」という挨拶にあたります。また「タクラになれ（タクラシャイ）！」といえは「頑張れ（力強いけ）！」、そして「あの車はタクラだ」といえは、故障も少なく悪路もよく走る車である

四連水門が完成するまであと二カ月、きつと今回の工事が彼等にとって技術的に役立つ事が、あとでわかる時が来る筈だ。そして、後世に残る建造物として、私の夢も残れば幸いである。

事を意味します。

「タクラ」とはこのような心身の力強さを表す言葉です。

「タクラ」と呼べば皆が振り向く

僕がまず、おや？と思うのは、こちらの人達はこの「タクラ」という言葉を好んで使い、「タクラである事」を誇りにしているからです。例えば、用水路でレイバー（作業員）が石を運んでいるところに、「お、あなたはタクラだね」と声をかけると、彼は自信たつぷりな顔で、「見ろ！」と、より大きな石を持って来て見せます。また、レイバーに仕事を頼むために「ヘイ！そのタクラな兄さん！」と呼べば、皆、当然のように「俺か？」と振り向きます。タクラである事は彼らが誇る価値なのです。

実際、この用水路の現場で出逢う人達がなんと「タクラ」なことでしょう！ 中村医師、日本人ワーカーの鈴木学さん、鬼木さん、近藤さん、川口さん、石橋さん、そして新たに、プロの現場の技術と経験を持っておられる西野さんが加わりました。皆、精神的にも肉体的にも抜群の「タクラっぷり」です。また、毎日ツルハシをふるい、蛇籠の石を積み続けている四百人のレイバー達、あらゆるトラブルに対処する総現場監督ヌール・

今日も、ド素人で博多弁丸出しの、ひとりの変な日本人が、水門現場にいる。

ザマーン、物腰は柔らかくも的確にレイバーを指揮する髭モジャのヤール・モハマド、中村先生から愛称（？）で「タヌキ」と呼ばれるハムユーン、こうした頼りになるタクラなスタッフ達がいいます。そんなタクラな人達と一緒に働く緊張感、いつも僕をドキドキさせ、前へ前へ駆り立ててくれます。

知識ではなく実践こそ

僕がこの「タクラ」という言葉について、もう一つおやおや？と思う点は、このように「タクラ」と呼ばれるべきものは、誰の目から見ても分かる「実質的な結果を生み出す力」である事です。つまり、抽象的に「アフガンの復興」を論じる知識によってではなく、実際に人を動かし、自ら事業を進める意志によって「ドクターサーブはタクラだ」などと言われます。用水路現場でツルハシを振るい、土を一振り一振り削り落とす作業こそが「タクラ」と形容されます。そして今、ベシヤワール会に賛同する皆様によって支えられているPMSの事業とは、まさに「タクラ」と呼ぶべき実質的な結果を生み出す力です。その力とは、戦争、即ちテロが世界を震撼させるような恐怖の力ではなく、一人一人の生活に希望を与える小さな力の集まりです。恐らくかつては戦争で戦うために、



ダラエヌールの試験農場で（左が進藤ワーカー）

あるいは戦争の中で生き延びる為に「タクラ」であつたはずの人々が、一つ一つの小さな生活の灯りを点す為に「タクラ」である、そんな「あたりまえ」の日々がPMSから人から人へと繋がって欲しい、と願います。そしてもちろんこの会報を目にされている皆さんが、よく食べよく眠り、大切な人達と共に笑い、時には悲しむ、そんな生活の灯りと共にありますように。

最後に、このPMSの事業を支えて来られた諸先輩方、ベシャワール会事務局、会員の皆様、また、縁あつてこの会報をご覧になっている方々一人一人が、心身「タクラ」で、しあわせと共にありますように。

医師辞職、急きよ

厳冬のラシウト診療所へ

PMS医局長・医師 仲地省吾

クリニック派遣直前に医師が辞職

PMS病院の医療スタッフにはクリニック（診療所）に二、三ヶ月に一回の頻度で一カ月間勤務しなければならぬという義務があります。クリニックと言っても日本の田舎の診療所のようなものではなく、ベシャワールから二日、三日かけて悪路を猛スピードで突っ走ってやっと到達するというような山奥のクリニックです。最近ではかうじて夜だけの電気があつたりするのですが、電話ももちろんなく、テレビやその他の娯楽もいっさい無い所です。従ってベシャワール在住の職員であっても、家族と連絡するとか、帰宅するとかというのは不可能に近くなります。ですからPMSの医療職のスタッフは入職時にはクリニックに派遣されることに合意しているのですが、それでもクリニックに一カ月間滞在するのはほんとに厳しい仕事です。その厳しさをすでに経験済みでも、中にはクリニックへの出発日時が近づいて来ると動揺する医師が出てきます。

十月はラシウト・クリニックの最後の月です。

ラシウトまでの唯一の道路であるラワリ峠（標高三千三百メートル程）が雪のため閉鎖されるので、クリニックは冬期は閉院となるのです。

十月のチーム出発予定の数日前になって、派遣予定になっていた医師が急に辞職を申し出て来ました。こういうことはこれまでにもしばしば起こったことなので、そう驚くほどのことではありませんが、現在PMS病院の医師数はぎりぎりの少ない人数でやっているので代わりの医師を見つけるのはとても困難です。私がベシャワールに初めて来た二〇〇二年の初め頃に比べると半分くらいの医師数になっています。アフガン戦争以後、多数のNGOがカーブルに来たため、多くのアフガン出身の医師がカーブルに帰って行ったのです。代わりに行ってくれる可能性のある医師に当たりますが、誰も行くことができないと言います。これまでもこういうことはいくらでもありました。が、いつも何とかなっていました。しかし、今度は無理でした。

パキスタン、アフガニスタンでは家族生活の条件が日本とはかなり異なります。子供や妻だけを残して夫が単身赴任するのは不可能です。家には必ず大人の男性がいなければなりません。たいていは大家族で複数以上の世帯が一つの敷地、建物に住んでいるので、そのような場合は問題ないのですが、我がPMSの医師は大部分がアフガン出身で、単家族の場合も多く、クリニックに派遣される場合は前もって、家族全員をアフガン内の実家に連れていくか、誰か男兄弟などを呼び寄せるという厄介な準備をしなければならないのです。

従って、突然クリニックに派遣要請されても、たいてい数日では準備は不可能です。一時はクリニックの早期閉院も検討されましたが、私が急ぎよく行くことになりました。

腸閉塞の乳児も

十月のラシウトは厳しい寒さでした。今年はさらに異常気象だったようで、大雪が何度も降り、私が滞在している間もラワリ峠以北のラシウトまでの道が雪や洪水のために何度も閉鎖になり、陸の孤島状態になっていました。三十センチくらいの降雪の日もあり、朝はいつも厚い氷が張っていました。どんなに寒くても、日本の病院や診療所のような暖房設備があれば問題ありませんが、ラシウトは高地にあり、低電圧の電気が夜供給されるだけです。私と看護師が居住する部屋では、辛うじて短時間薪を焚いていましたが、その他の部屋には暖房はありません。でも人間は何もなければならぬに、何とかで



ラシウト診療所に急ぎよ派遣された仲地医師

きるものです。患者さんたちも、こんな厳しい寒さの中を一、二時間かけて歩いて受診にやって来ます。さすがに夏ほどは患者数は多くありませんし、ほとんどの患者さんは軽症ですが、腹が膨らんで膨らんで腸閉塞気味になった乳児が真夜中に来院して、あわてたこともありました。

夏のラシウトも天国のような絶景ですが、六千メートル級の山々に囲まれたラシウトが一面雪に覆われているのも、ほんとに美しい景色です。十月は途中からラマザン（断食月）になり、昼食はないのですが、夕食は毎日いつもより豪華になり、一緒に滞在した看護師のイクラムが毎晩日本の天ぷらに似た副食も作ってくれました。

断崖絶壁、チェーンもなく……

一カ月の滞在も終わりに近づき、十月の終わりにベシャワールから迎えの車が来ます。さすがに一カ月も雪の中でテレビも新聞も電話もない状況で暮らしていると、ベシャワールでの文明生活（？）がほんとに恋しくなってきました。迎えが来る日を指折り数えて、首を長くして待っているのです。これまで来たときは最終月ではなく、いつも新しいチームと入れ替わりでした。ですからクリニックを去るときは満面の笑みで新しいチームに手を振りつつ帰るのですが、今回は最終月でクリニックの医薬品や生活の備品などほとんどベシャワールに引き揚げます。ラシウトで雇用している食事兼守衛係りのシャオセンだけが残って冬の間の番をします。ですから、今回はシャオセンを一人残してラシウトを去るときは何だか感傷的な

気分になってしまいました。

九月の終わりに来た時と比べて、帰りの行程はあちこちで洪水と雪によって道路が寸断されており大変でした。しかもラワリ峠は全面雪に覆われ頂上付近は数メートルの雪のトンネル状態です。当然凍結しており、この時期には普通、雪はまだないので我がPMSの車はチェーンも用意していませんでした。断崖絶壁をつるつる滑りながら4WDと我がドライバーの巧みな運転さばきで無事にベシャワールに戻ってきたのです。

それでも、また行きたいと思うラシウトです。

▼寄附をしていただく皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄附については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、御願いたします。

▼記入は分かりやすく▼

*ご寄附をお送り頂いた郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

*今回の会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手を使用しております。

診療体制の混乱に

とまどつています

PMS看護部長・院長代理 藤田千代子

高給求めて去る医療スタッフ

ベシャワール会の皆様お元気でしょうか。

ふと気がつくところから来てから、十四年が夢のように過ぎていました。

ベシャワールも、アフガニスタンも、決して人を退屈させません、といえは聞こえはいいですが、年々、問題が大きくなり、また増え続けています。三年前に始まり現在も続いているアフガン空爆、復興支援のニュース以後、いったい現地で何が起きているのか、これまで多くのワーカーたちが報告してきたとおりです。

ところが、今度ばかりは面食^{めんく}らってしまいました。手塩^{てしお}にかけて育てた多くの医療スタッフは、次々とカブールや国外に移住、アフガニスタン国内の診療所の運営が困難に陥ったのです。これは、他の外国団体や国連プロジェクトが高給を出すこと、上部の政治的な取引で、診療所の内規^{ないき}までが規制され、動きがなくなつたこともありま

す。私たちが過去十数年間、精力を注いで維持してきた診療所です。文字通り、中村医師が命がけで

建設し、皆で職員をやりくりし、薬品の配給体制を整え、大変な努力をかけてきました。何だか割り切れない気分です、寂しいです。

ハンセン病診療の難しさ

元々私達の診療所は、らい（ハンセン病）の問題が出发点でした。らいの多発地帯である東部アフガニスタンから国境を越えパキスタンのベシャワールまで来るを得ない患者のために便宜を図ろうというものでした。ところが、無医地区の一般診療所としては確かに十分役割を果たしてきたものの、ハンセン病患者は殆ど恩恵に浴することはありませんでした。周囲の目を気にして診療所に来ないのです。

また医療従事者がハンセン病に関心がないという実態もありました。

ベシャワールの病院ではらいに関する仕事をさらに充実させようと日本人医師を中心に進行中ではありましたが、担当となった医師の都合によりたち消えになってしまい、ハンセン病や類似の障害を抱えた人の診療は次第に下火になっていきました。

新たに雇われる医師たちは、ハンセン病や難病の診療に興味を示さず、内視鏡やエコーなど新しい技術を覚えると、さつさと外でサイドビジネスを始め病院を出てゆくという状態です。

技術を得るとすぐ転職

ここ数年の私達の病院は診療所に派遣する医師を確保するため、及びそのトレーニングをする教

育施設としての方針で進められてきました。

医師を確保するためにエコー検査（現地では心エコー、腹部エコーはドクターの高級技術です）や胃カメラなどが取り入れられ、と同時に心電図やレントゲン写真の判読などもトレーニングに加えられる、今では心電図を読める医師が数人いるようになりました。しかし、技術を習得すると、古参^{こさん}のパキスタン医師は高給ではないけれど管理がルーズで、午後からは個人診療所で稼^{かせ}ぎ、退職後は恩給がつく公務員を目指して、またアフガ



アフガン国内を訪れた藤田看護部長



順調に生長する柳の木々（根っこが用水路を護岸する）

ン人医師はカーブルで他の機関での高給を当てに
してどんどん退職して行きました。中には病院で
診療所への出発前日、常時行われるミーティング
に出席し意見も活発にのべていた医師が翌日出発
寸前に退職した時もありました。私は驚きのあま
り怒りも忘れたほでした。

二〇〇一年九月以降はさらにこれでもかこれ
でもかこんなことが繰り返されており、アフガニ
スタンやパキスタンでは、日本でもそうであるよ

うに医師は一般の労働者より高給で雇用され、そ
の上サイドビジネスも当たり前前の世界です。そん
な人達は他の人を蹴散らしてでも楽をしてもっと
もっととお金を求めているのを目にしました。そ
していつも困るのは診療所に来る住民です。

ほとんど無一物に近かった状態の時のほうが、
立派な手術室を備えた今よりはるかに活発だっ
たという気もします。私も管理的な仕事がいぶ
ん増え、患者たちに接する時間が殆どなくなり、
看護部を時々と以前トレーニングした現地
スタッフがずいぶん自己流に作業をしているとこ
ろも目立ち、多忙になった割に充実感のない状態
が数年続いています。

「変わらないものは変わらない」

得てして私たちは、何か目立つものが建つと事
業が成ったように思い、逆に目立たないものは大
切であっても評価されない、そんな現実を見てき
ました。それに、かつて誰もよりつかない所であ
った診療所付近は、各国のNGOが陣取り始め、
米軍や新政府がコントロールしようとしています。
過去の病院の移り変わりを振り返りながら、複
雑な思いです。でも、見えるものを失うよりも、
見えないものを保つ方が大切な場合があります。
現地と日本を見てきて「表面の事態がどんなに変
わっても、変わらないものは変わらない」という
のが、大きな慰めのような気がしています。

この原稿はちょうどクリスマススの頃に皆様に届
けられるそうですが、日本にいる頃「ホワイトク

表紙をめくる小さな物語45

アリのハルブザア売り

甲斐大策

陽が昇る。アリは冷気に身をすくめながら、母
屋の裏手にある納屋へ廻った。納屋の入口近く、
干し草の上に、既に黄金色の部分の拡張したハル
ブザア（メロン）が二十個程並んでいる。祖父は、
自慢のハルブザアをそろそろ売りに出す筈だった。
四日前に生まれた仔驢馬は、長いまつ毛を伏せ
て母驢馬により添い、納屋の壁近くに立つて身じ
ろぎもしない。ハルブザアを売りに行く時、仔驢
馬は従ってこられるだろうか、とアリは少し心配
だった。

南の平原の果てにつづくテグコー（小刀の峰）
の裾は、淡いベージュ色のびろうどみたいに陰
翳を拡げていく。

古都バルフの西、徒歩二時間程の小さな村で、
アリは祖父と二人で暮す。両親は、バルフの隣町、
マザールで住みこみ料理人として生活、月一度は
村へ戻る。

祖父が作るハルブザアは、アフガニスタン全土
一とされるバルフのハルブザアの中でも、際立っ
て甘く柔らかだった。近隣の人々に限らず、舌の
肥えたカーブルからのドライバー達にも祖父のハ
ルブザアは知られた存在だった。
祖父は、手塩にかけたハルブザアを、バルフ、
マザール間の国道の脇で売る。ハルブザアの一部
を人差し指大に抜き取って試食しては割高で売り、
傷ものになった残りの数個を割安に売る、街の果
物屋で一般的なそんな売り方を祖父は好まなかつ
た。

「私のハルブザアにコシディホル（試食）は要
らない……」

微笑してそういう祖父の横に坐り、アリは一日
をハルブザア売りに過す。物心ついてからこの五、
六年、アリにとって楽しい初冬の行事である。

国道からやや離れた草原で、仔驢馬と母驢馬は
行んでいる。
時折、風の中に仄かな甘い香りが流れるのだっ
た。

ペシャワール会2005年カレンダー 「抱擁の大地」

同封ハガキで最終申込受付中!

画・甲斐大策

1500円(税・送料込)／A2判オールカラー

*例年ご好評いただいておりますカレンダーが完成致しました。本年も、毎号の表紙絵を飾る甲斐大策氏の作です。タイトルは「抱擁の大地」。アフガニスタンはイスラムを奉ずる厳格な宗教国家ですが、同時に多民族・多部族の厳しい社会にあって、平時、戦時を問わず「抱擁」という日々の行為を通じ、他者への「信」を貫く人々の世界です。人々の様々な「抱擁」の情景が、雄大な自然とともに7点の画に描かれております。最終予約を受け付けておりますのでふるってご注文下さい。

*サイズはA2判、オールカラー、2カ月1枚、価格は1500円(税込・送料込)です。同封のハガキで申込みを受け付けております。



1.2月



5.6月



11.12月

リスマス」などただ言葉の美しさに耳を傾けていた気楽さとうって変わり、パキスタンもアフガニスタンも、翌年の糧になる作物が作れるかどうか

かに大きく関わる冬の恵みである雪が、山を深く覆うことを願ってやみません。もうすぐ過ぎ去ろうとしている二〇〇四年、私

達の現地で作業を支えてくださった多くの方々に心から感謝しております。

●事務局便り

*アフガンの大統領選ではカルザイ氏が選ばれ、アメリカではブッシュ大統領が再選された。イラクの大量破壊兵器も存在せず、フセイン政権とアルカイダとの関係も否定されたブッシュ政権は、侵攻をアフガン同様イラク「民主化」のためであると強弁し続けている。その「大義を失った」ブッシュ政権を無条件に支持しているのが、日本政府である。そして「対テロ戦争」によって「敵」とされた人々は、日本と日本人を米国と同陣営であると名指しして来た。

*私たちは自衛隊がイラクに派兵された後、現場の車輛から日の丸を消しているが、自衛隊の駐留延長によって、私たちのリスクも延長される。日本政府が「民主化」や「人道支援」を強調すればするほど、対外的にはNGOの存在との差異が曖昧にされることになる。先頃の人質事件は、海外で活動する日本人をその主観的意図とは無関係に、全て米国の同盟者と見なすというメッセージであった。

*今、バクダッドでは、聞き分けのない子どもを叱る時、親はこう言うという。「そんなに言うことを聞かないや、デモクラシーが来るぞ!」

イラクでは、デモクラシー（民主主義）が爆弾や戦車とともにやって来たことを、子どもでも知っているのである。

◎村から

♪

寒い時季になると二〇〇一年の驟然とした様子を思い出す。「いのちの基金」を呼びかけ、会のこと全国に知られてから事務局が戦場の様子を呈し、毎日朝から夜遅く迄多くの人々で溢れ、全国からの支援金を郵便局から銀行へ、そして現地に、又膨大な量の払込取扱票の整理、礼状書き、全員が必死で取り組んだあの時の熱気を忘れようとしてもまだ無理というもの。あの時、出勤前に事務局に立ち寄り仕事をした人の温もりを感じた事もあった。弁当持参の主婦達、互いの家庭料理の味を賞味しあい楽しんだこともあった。寒い時季でよかった、夕食の準備がやり易かったから……いろいろな事があったあれから三年経過した今、現地では人々の命を守るための事業が進められている。支援の輪も広がった。あの時の仕事量をやり抜いた経験が、今活かされそれが現地の活動につながっているのは嬉しいかぎりである。支援者の声を糧に払込取扱票の点検整理をしながら、会に対する信頼を決して裏切ることのない様にと自省するこの頃である。(K)

会 則

- ① 本会の名称をベシヤワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 役員の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARAH HOUSE
(〒八一〇一〇〇四一 福岡市中央区大名一丁目一〇一二五 上村第二ビル三〇七号 TEL七三二一三三七二) 内におく。

中村哲医師の本
空爆と「復興」

—アフガン最前線報告—



9.11テロ直後から2003年末まで、中村医師と現地日本人スタッフから届いた、鬼気迫る活動報告集【2刷】1890円

辺境で診る
辺境から見る

ドラエヌールへの道 2100円【3刷】

医者 井戸を掘る 1890円【9刷】

医は国境を越えて 2100円【6刷】

ベシヤワールにて 1890円【8刷】

聖愚者 甲斐大策
の物語

「表紙をめぐる小さな物語」が、書下しを加え一冊に 1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
TEL 092(714)4838

アフガニスタンの
診療所から

1260円 東京都台東区蔵前2-6-4
筑摩書房 TEL 03(5687)2670

ベシヤワール会報
「合本」1983~2004

B5判上製1300頁 10500円
注文は直接事務局へ

価格はすべて税込価格(税5%)です